

スポーツの魅力と本との出会いについて考える

「継続は力なり」という言葉が昔から好きである。どんな些細なことでもコツコツと続けているとびっくりするような力になるのではないかと夢を膨らませて解釈をしている。

自分は、スポーツをすることが特別得意ではないのだけれど全般的に好き、スポーツ観戦も好き、高校野球や箱根駅伝、オリンピックもTVでの観戦ばかりだけれど、いつも熱く応援している。スポーツ選手それぞれがどんなメンタルでどのような状況でその試合に至っているのか、監督はどのような人なのか、とても興味があって、素人ながら特番などがあれば夢中で観ている。

選手一人一人の背景は異なる。小さいころから才能があり、環境にも恵まれて活躍をする選手がいる。才能には勝てないと誰もが思うのだけれど、才能だけではどんな世界でも通用しないのだと思う。必ず、地道な努力もあって成功への道がつながっている。けれど、努力を重ねても残念ながら報われない人もいる。どちらかというとその割合の方が多いのかもしれない。でも、スポーツのゴールは、頂点に立つことだけじゃない。人と関わりながら学んだこと、努力を重ねた過程、辛かったこと、すべてが自分の糧になる。また、全力で頑張る姿は人に感動を与え、そしてプレーを応援していたすべての人が力をもらえることも魅力なのかもしれない。

私が今、気に入っている本がある。『心を整える。勝利をたぐり寄せるための56の習慣』（長谷部誠著 幻冬舎）。この本は、愛知学院大学歯学薬学図書館情報センターでの仕事を始めてから知った本である。ラグビーの世界カップのときに「にわかファン」という言葉が流行ったが、私はサッカーの「にわかファン」である。サッカーの世界カップが始まり、巷が騒ぎ出すとなんとなく試合を見始める。著者の長谷部選手の顔や試合での様子は時々観て知っていたが、サッカーのルールもかろうじてわかる程度である。でも、この本を読んで、キャプテンとして日本のサッカー界を引っ張ってきた長谷部選手のサッカーへの取り組み方にとっても興味を持った。誰よりも早く会場に入って準備をする、読書家であるなど、サッカー選手というよりは長谷部誠という人の人となりがかかれていて、何かをやろうとするとき、心構えや準備で結果が大きく変わるのとは既知のことであるが、この本を読んで明確になったと思った。好きで何度も読み返している。

漫画や伝記、小説など人が心を動かされる本は人によってちがう。好みもあるし、興味関心事によっても異なる。“こういうのは読まないな”と置いていてもふとしたことで新しい本を手にすることもある。本さえ手にできれば（電子書籍を読む場合も同様に）遠くまで出かけなくてもたくさんのお出会いがある。コロナ禍で以前のような生活はできない昨今、空いた少しの時間に本を読むのはどうだろう。

当館では、テーマを決めて本を紹介しているコーナー「コンセプトコーナー」がある。2021年2-3月は、「一冊が気づかせてくれた。～私の大切な本～」というテーマで本を紹介する。

先ほどの『心を整える。勝利をたぐり寄せるための56の習慣』（長谷部誠著 幻冬舎）も紹介している。出会ったことで影響を受けた本は何かと考えてみるだけでも面白い。そして、誰かが影響を受けた本をちょっと手にしてみるとまた、新しい世界がそこにはあるのかもしれない。いろいろな世界にぜひ足を踏み入れて欲しい。

(スポーツと本が好きな司書)

